The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞井川裕覚『近代日本の仏教と福祉 ： 公共性と社会倫理の視点から』
Author(s)	小林, 惇道
Citation	宗教と社会貢献. 2024, 14(1), p. 55-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95048
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

井川裕覚
『近代日本の仏教と福祉―公共性と社会倫理の視点から―』
法藏館、2023 年 1 月、A5 判、380 頁、5,000 円＋税

小林惇道*

1. 本書の構成

本書は、2021 年上智大学提出博士論文「近代日本における仏教社会事業の公共的役割と社会倫理」を土台に、福田会育児院とキリスト教の動向を追加して、序章、結章を含め、二部構成、全七章で構成されており、2000 年代、特に東日本大震災以降、注目されることとなった宗教の社会貢献活動について、仏教の社会事業・社会福祉に注目して、宗教者がいかに苦しみを抱える人々へのケアを提供できるかという、筆者の実存的関心に基づいて、公共空間での宗教の価値を考察した書籍である。

各章のタイトルと構成は、以下の通りである。

序　章　近代日本の福祉をめぐる公共空間と仏教
第Ⅰ部　子どもをめぐる社会福祉活動と宗教
第一章　瓜生イワの慈善事業と「福祉思想」―「人間性の尊重」と仏教倫理―
第二章　明治期における仏教倫理の展開と仏教社会福祉活動―福田会育児院の養護実践と女性の関与―
第三章　明治期のキリスト教的社会福祉活動の公共的機能―石井十次の岡山孤児院、留岡幸助の監獄改良と家庭学校―
第Ⅱ部　セツルメントの発展と浄土宗社会派による仏教社会福祉活動
第四章　渡辺海旭による仏教社会事業の公共的機能―ドイツ型セツルメントと共済思想―
第五章　長谷川良信のセツルメントにおける教育的側面と社会倫理―大正期における「感恩愛人」の思想と実践―
結　章　近代日本における仏教と福祉

* 大正大学非常勤講師

序章では、カサノヴァの公共宗教論、宗教の社会貢献研究、近代仏教史研究、社会福祉・社会事業研究などの先行研究を検討した上で、問題の所在が明らかにされる。

第Ⅰ部は三章構成で、第一章では、宗派を超えて仏教者と協力して育児保護事業を立ち上げた瓜生イワの事業と思想や、瓜生イワの生育環境と周りの影響、第二章では、キリスト教に先駆けて設立された育児保護施設である福田会育児院の養護実践と女性の関与、第三章では、石井十次の岡山孤児院と留岡幸助の監獄改良運動において、キリスト教徒による社会事業が仏教社会福祉活動に、また公共空間の形成にいかに影響を与えたかが、検討されている。

第Ⅱ部は二章構成で、第四章では、渡辺海旭が設立した労働者自立支援事業である浄土宗労働共済会や共済思想、第五章では、渡辺海旭の門下生である長谷川良信によるセツルメント事業が、検討されている。

そして終章では、これまでの論点を整理したうえで、本書の意義を示している。

2. 本書へのコメント

評者は、これまで日清・日露戦争期の仏教教団の動向を研究し、日露戦争と時期を相前後した明治三〇年代後半から四〇年代にかけて、仏教教団や仏教者が積極的に関与した救貧事業や慈善事業が広がった背景に、日清・日露の戦争期に仏教教団が行った施策と、それに対する評価が少なからず影響を及ぼしていると考えている［小林 2022］。本書は、評者の関心と連続する動きとして、大変勉強になるものであった。

また、本書は多くの史資料を用い、実証的な研究として大いに評価できるものである。特に、第三章は「政府・キリスト教・仏教の三者の交渉」（p.198）を丁寧に追っており、明治三〇年代の岡山県で、石井十次の岡山孤児院の影響を受け、仏教系や半官半民の施設を含む多様な児童保護施設や感化事業が設立され、岡山孤児院自体も仏教系の岡山感化院に影響を受けながら新たな取り組みへと展開していく様や、キリスト教徒や仏教徒が多様な主体と相互に交渉し合う関係のもとで、自律的な宗教的信念に基づく規範的主張を行い、さらには世俗的倫理観とは異なる価値観を公共圏に提示して、そ

うした価値観に基づく実践を通して福祉をめぐる公共空間の形成を促した様が描かれ、それは、「福祉をめぐる公共空間を捉えようとするとき、その関係者各々の動向に着目するだけでなく、それらが相互に関わることで形成された社会福祉の歴史がもつダイナミズムを捉える視座が求められる」（p.200）との指摘を見事に回収している。

一方で、気になる点もあった。以下、評者の雑感を記したい。

まず、本書では、明治中期、後期、大正期と時代ごとに影響力があったと考えられる仏教者と、仏教を相対化するためにキリスト教徒を選定したと思われるが、「仏教が公的領域と相互に交渉を重ねながら、社会福祉領域において公共的な機能を担っていく姿を明らかにする」（p.31）と本書が指摘するからには、事例の代表性がやはり問われるだろう。

福田会育児院、石井十次、岡山孤児院、渡辺海旭など、本書が取り上げた事例について、その代表性は各章で記述があるが、キリスト教を含む宗教の社会福祉についての全体像を提示した上で、本事例のもつ意味あいをきちんと示した方が、より理解が進んだのではないかと感じた。特に、第一章で取り上げた瓜生イワは、「希有な事例」（p.318）と筆者自身が指摘するように、瓜生が取り上げなければならない人物であるのか疑問が残り、さらには瓜生が「福祉をめぐる公共空間の形成を促すような活動の萌芽」（p.92）と指摘できるのかどうか、明確ではなかったと思われる。

二点目に、「仏教が公的領域と相互に交渉を重ねながら、社会福祉領域において公共的な機能を担っていく姿を明らかにする」（p.31）のが本書の目的であるとするが、この場合の“仏教”は何を指しているのか、疑問が残った。序章に、「仏教社会福祉活動に関与した人物の歴史に着目」（p.36）との記述があるが、第二章では福田会育児院、第三章では岡山県下の仏教界（本願寺派教誨師・千輪性海、真言宗教誨師・和田大圓、岡山感化院、仏教界の支援を受けた大石平が設立した菩薩会孤児院、本願寺派僧侶・津田白印によって設立された甘露育児院など）であり、“人物”以外も含まれている。“仏教”といっても、教団なのか、在野の仏教者や仏教組織なのかで、異なるベクトルが働くことが大いに考えられ、“仏教”と一括りにするのではなく、仏教者と組織、教団など対象を精緻に検討していくことが必要ではないかと考える。

三点目に、本書の中で、「宗教が担った公共的機能とは、キリスト教徒や

仏教徒が多様な主体と相互に交渉し合う関係のもとで、自律的な宗教的信念に基づく規範的主張を行い、また世俗的倫理観とは異なる価値観を公共圏に提示し、そうした価値観に基づく実践を通して福祉をめぐる公共空間の形成を促すことにあった」（p.198）、また、「大草の無料宿泊所の活動の場合、留岡幸助の家庭学校に顕著であった対象者の人格を尊ぶ姿勢が明確には見られないことから、世俗的な福祉活動に対する規範的主張や異議申し立てを行うという意味での公共的機能を担うまでには至らなかったといえる」（p.199）とあるが、ここに記述されることが“宗教のもつ公共的機能”と言えるのか、また、本書の主要課題である“宗教のもつ公共的機能”（p.200ほか）が明確に何を指しているのか、最後まで消化しきれなかった。

ただし、本書は多くの先行研究を丁寧に読み込んだ上で執筆されており、その丁寧な仕事ぶりは註の膨大さにもあらわれている。仏教の社会事業・社会福祉が、近代日本の福祉をめぐる公共空間といかに関わってきたかという問いは、筆者の実証的な研究によって、近代仏教史、社会福祉史、公共宗教論、宗教と社会貢献など、複数の研究分野の発展に貢献するものであるのは間違いないことといえよう。

参考文献

小林惇道 2022『近代仏教教団と戦争―日清・日露戦争期を中心に―』法藏館。